

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

脊柱靭帯骨化症に関する調査研究

研究分担者 谷口 昇 鹿児島大学整形外科 教授

研究協力者 河村 一郎 鹿児島大学整形外科 助教

研究要旨

頸椎後縦靭帯骨化症において上位頸椎レベルまで骨化伸展する症例も散見される。発育性脊柱管狭窄を有する症例においては脊柱管残余径が小さくなり、骨化占拠率も高度となる。しかし、中下位頸椎においては、発育性脊柱管狭窄の定義があるが、上位頸椎においては明確な定義はない。上位頸椎特に環椎レベルでの脊柱管面積の評価を行い、OPLL と環椎低形成の関連を調査した。

A．研究目的

脊柱靭帯骨化症例も含め、上位頸椎、特に環椎脊柱管面積と疾患関連性を評価すること。

B．研究方法

当科にて脊髄造影、CTM を行った患者を対象とし、後ろ向きに脊柱管面積を評価した。評価は CT での横断面で C1 皮質内側をトリミングし、計測した。

C．研究結果

CT における環椎の横断面性の平均値は男性：528 mm²、女性：490 mm²であった。

脊柱靭帯骨化症例と環椎低形成との関連は認めなかった。歯突起後方偽腫瘍症例では環椎低形成との関連が示唆された。

D．考察

今回の調査で OPLL と環椎低形成との関連は認めなかった。歯突起後方偽腫瘍の病因はまだ明らかではないが、頸椎の強直との関連は示唆される。

E．結論

環椎低形成とOPLLとの関連を評価した。両者に関連性は認めなかった。

F．健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G．研究発表

1.論文発表
なし

2.学会発表

歯突起後方偽腫瘍発生要因として環椎低形成の検討

Journal of Spine Research vol10(3) 2019

H．知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1.特許取得

なし

2.実用新案登録

なし

3.その他

なし